



TITLE:

静脩 Vol. 1 No. 3 (1965.1) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 1 No. 3 (1965.1) [全文]. 静脩 1965, 1(3)

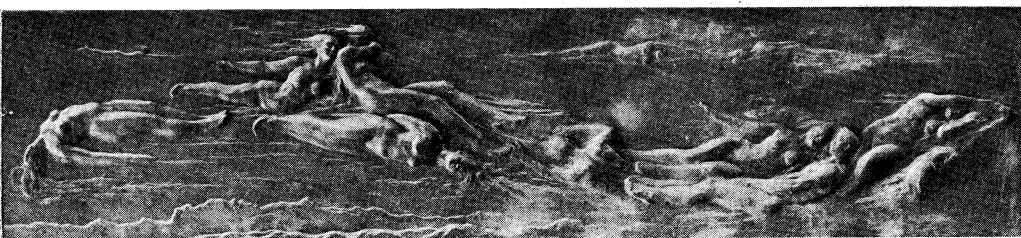
ISSUE DATE:

1965-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65905>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1965年 1月

Vol. 1, No. 3

随 想

奥 田 東

知識を伝える方法は、時代とともに進歩してきた。文字のない時代は、専ら記憶と言葉によって人から人へ知識が伝えられていたが、文字が作られ、印刷技術が発達するにつれて、その伝達はより速く、また広く行われるようになり、その上知識を記録として後世に残すことが可能になった。これは偉大な進歩であって、それが人類の文化の向上に果した功績は測り知れないものがある。

さらに、ラジオ、テレビ、テープレコーダーなどが普及発達してからは、一層広範囲に、しかも速かに伝達されるようになった。とくにテレビでは事象そのものを見せるのであるから、言語の相違という障壁までも取り除いて、世界中のひとびとに伝えることができることになった。

昨年のオリンピックは、人工衛星を使って地球の裏側まで放送したのであるが、10年前には予想もしなかったことで、これ以上の速さと広さは、他の方法では望めない。しかも、事象をそのまま見せるので正確であり、また記録として保存し再放送することも可能なのであるから、伝達方法としては最も優れたものといってよいであろう。

ところで、知識を受けとる側に立ってみると、それを十分に理解し習得したい希望があるので、伝達の方法に対する選択の基準が変わってくるのであって、速さ、広さ、正確さ以外の条件が加わる。たとえば、理解を深めるには質疑応答が必要であるが、それには人から人へという原始的方法にも捨て難い優れた点がある。

また、外国語の本を、辞書を引きながら苦勞して読むよりも、訳本で読む方が、楽で速いが、内容をほんとうに理解し自分のものにするのには、かえって苦勞して読む方が有効なものである。

近頃は通信教育が発達して、テレビやラジオを使って、家庭で講義を聞くこともできるようになり、また学校でも利用されているようである。使い方によっては良いと思うが、注意しないと、規格化された、独創性の乏しい人間を作ることになる危険があるように思われる。

イギリスの労働党の政策の一つとして、“University of the Air”の設立というのがあった。総選挙前に聞いたのであるが、労働党内閣が成立したのであるから、おそらく実現するであろう。それはテレビを使う一種の通信教育大学であるが、特長としては、各地に指導教官が配置され、学生は週末にその教官を訪問して、質問したり指導を受けることができるようになっていることである。大学教育の受けられなかった勤労者の成人教育としてはおもしろいと思うが、指導教官の素質が問題であり、またその学生が利用できる図書館の整備が必要であろう。

これからも、いろいろの教育方法が工夫されるであろうが、図書館で、あるいは研究室や書斎で、静かに思索しながら、一字一句をかみしめて本を読む楽しみと重要性は、今後変わらないであろう。

(京都大学総長)

京都大学図書館改善特別委員会発足す

本誌第2号で報ぜられたように、大学図書館の近代化運動は、各方面の強力なバックアップを受けつつある。しかし、大学図書館の近代化に対する要望が、外部からもこのように強く起ってきていることは、それだけ大学図書館の立遅れをいかに克服するかというこの問題の深刻さを、裏書きするものといえよう。

本学の場合、1963年度における全学の受入図書総冊数は7万冊に達し、その金額も、寄贈図書の評価額を含めると、2億円に近い。また大学の発展にともなう教官・学生数の増加も著しいが、全学の図書館組織全体は、それに見合うだけの十分な発展を示していない。本学の場合においても、図書館近代化の問題はきわめて深刻である。したがってこの際、本学図書館組織全体の機能、運営等を再検討し、京都大学図書館の今後進むべき太いレールをしく必要性が痛感されてきた。

この仕事をするために、附属図書館商議会の承認をへて、商議会の特別委員会として、京都大学図書館改善特別委員会を設けることになった。委員会に各学部、教養部、および附置研究所から教授または助教授1名づつを委員として出していただき、図書館の利用者の立場で、大学図書館近代化の問題を審議していくことを目的としている。当初の予定では、月1回開催し、1年間くらいでなんらかの結論を出すことが期待されている。

第1回委員会は、昨年末12月11日（金）午後3時から開かれ、この特別委員会の委員長として堀江附属図書館長が選ばれた。副委員長については、審議の過程で具体的に人選することになった。

委員会には、図書館側から各種資料や改善計画の主眼点などが提出されていたが、第1回委員会では、それらにとらわれず、自由に発言していただいたが、附属図書館の概念について種々の意見が出された。

第2回委員会は本年1月12日（火）に開催されたが、図書館サービスの問題のうち、とくに図書整理業務上の本館と部局図書室の関係の問題に論議が集中し、分散整理方式か集中整理方式かについて、意見が交換された。

なお第3回委員会は2月9日（火）午後3時から開催の予定である。

特別委員会のメンバーは次の通りである。

委員長	堀江 保蔵（附属図書館長）	委 員	高松 英雄（結核研究所教授）
委 員	前川貞次郎（文学部教授）	〃	平岡 武夫（人文科学研究所教授）
〃	小倉 親雄（教育学部助教授）	〃	鈎 三郎（工学研究所教授）
〃	林 良平（法学部教授）	〃	岩井 和夫（食糧科学研究所教授）
〃	出口 勇蔵（経済学部教授）	〃	角谷 和男（木材研究所教授）
〃	市川 衛（理学部教授）	〃	吉川 宗治（防災研究所教授）
〃	脇坂 行一（医学部教授）	〃	杉野 幸夫（ウイルス研究所教授）
〃	宇野 豊三（薬学部教授）	〃	行沢 健三（経済研究所教授）
〃	宍戸 圭一（工学部教授）	〃	福原満洲雄（数理解析研究所教授）
〃	岸根 卓郎（農学部教授）	幹 事	岩猿 敏生（整理課長兼事務部長 事務取扱）
〃	渡辺 明正（教養部教授）		
〃	清水 栄（化学研究所教授）	〃	有本利三郎（閲覧課長）

夢の図書館

初ゆめ 1 片桐靖夫

ある小春日の午後、ドイツ語の授業中あまりに眠くなったので、僕はこっそりと教室を抜け出してぶらりと散歩に出た。いつものように吉田神社の参道から宗忠神社へと道を曲ったつもりが、今日はどうした事かいつまでたっても神社の屋根すら見えてこない。これはどうした事かと、とまどっていると、歩きもしないのに動いているようだ。ああ、いつの間にか僕はベルト・ウェイに乗っているではないか。一体ここはどこだろうときょろきょろしていると、駅らしきものが見えてきた。その前へすうっと止まったので、勇気を出して駅の中へ入って行くと、頭の大きい、宇宙服を着た火星人(?)のような人がこちらへ近づいて来て、突然僕に話しかけた。

「ようこそ21世紀へ。実はあのベルト・ウェイはタイムマシンでしてね。今日はひとつ21世紀の京大をご案内しましょう」

僕はこいつはしめたと思った。21世紀の京大というのは後年の参考になるはずだから。そこで僕は21世紀の京大を見る機会を得たのである。以下の話はその見物の一コマですが、皆様の興味がある図書館の部分を抜粋しましょう。

第K—213号校舎からベルト・ウェイで総合京大図書館へと約12時数単位(2分程)で着いた。ここはアルミ材にガラス張りの地上8階、地下2階の平べったい建物で小高い丘の上にある。まわりはこんもりした森で、そこだけ芝生が植わっていて、日当りのいい静かな環境である。自動ドアを通過してまず1階をのぞいて見ると、大ホテルのロビーもこうまでは、とばかりに豪華なぶ厚い絨たんの上にソファが並べてあ

て、あちらの方にはマガジン・コーナーがある。学生達は読んだ本について何かと議論したり、雑誌・新聞を楽しんでいるようすである。右端には読書相談所があって、係員がその本の難解な部分等を学生に説明したりしている。また図書案内もここである。空気エレベーターで2階へ行くと、これは大きなレストランになっていて、ビュッフェ、喫茶部までついている。学生は全て無料なので一般の人がまぎれこむのが悩みの種だそう。3階は学習室である。全学生1人にひとつの机を持っていて、学校にいて、ひまな時にはここで学習するという。辞書・参考書・研究文献等が備えつけになっているので大変便利だ。

4階は大閲覧室で、多くの学生が音ひとつ立てずに読書に熱中している。書物は5階の大きな書架に入っていて、学生は自由にその本を4階に持ってきて読んでいる。ところで館外貸出はと聞くと、行なっていないとの事。だがその理由は6階に行くとすぐにわかる。ここにはずらりと複写機が並んでいて、学生はまたたく間に本を複写してもらえるのである。これも無料のせい、利用者が多くて困る程だという事だ。

7階は図書館の事務室。多くの人々が奇妙な機械を使って、忙しそうに働いている。8階は体育館、屋上はプールと、勉強疲れの学生が汗を流して運動している。とにかく学生の天国というほど至れり尽せりの設備だが、学生達は今図書館の地下をボーリング場とスケートリンクにせよと要求しているそうである。

あまりに素晴らしいのでうっとりしていると、向うから20世紀人らしい人がこちらをにらんで歩いて来た。よく見ると、ああ、彼はドイツ語の教師ではないか。彼は突然大声で、「片桐君。11行目から訳しなさい」と叫んだ。びっくりしてとび上がると、教室のいすからころがり落ちてしまった。」

(経済学部1回生)

初ゆめ 2 若井 勲 夫

私は、いつか夢の中に入っていた。

新しくできた教養部図書館が立っている。まず、調べものをするため、目的の本を幾冊か借り、個室の学習室に向う。ここは、周囲の騒音から閉ざされ、静かに勉強できる。自分の部屋のように感じられる。辞典を見たいときは、資料室に行けばよい。そこには、年鑑や新聞の縮刷版なども備えられている。

閲覧室に行く。ここは、ただの自習室、あるいは談話室などになり下っているような現状とは違って、本来の面目たる本を読む部屋である。椅子はソファである。採光はは十分、暖房もきいている。お茶の用意まであり、机には花が飾ってある。部屋の中は静かで、楽しい雰囲気の流れている。本はすべて開架式である。室に入るときは、必要なもの以外の持物は、ロッカーに収めることになっている。目録室も部屋として独立している。ここには本は、書庫に安全に保管されている。貸出は、館内では5冊、館外では2冊。休暇中は5冊まで借りられ、この点大変便利である。また、事務員の休憩時間も、11時半から12時半までになり、昼の休憩時間に利用したいことの多いわれわれには都合がよい。それに、事務員は、図書館業務によく通じ、レファレンス・サービスも行きとどき、親切である。

隣りは自習室である。ここは、図書館の本と関係なく自分の勉強をするところである。自習室は本来の図書館の任務ではないのかも知れないが、この部屋は広く、机ごとに蛍光灯が備えつけてある。

次の部屋は、談話室である。学生会館もなく、憩う場もなく、緑も少ないこの学校にとっては、格好のものである。ステレオまで置いてあるのには驚いた。連日満員の状態である。

なかに、会議室や小講堂もある。本当

に、学生のための図書館ができた。これで教養部生も大分救われることであろうと考えながら外に出た。まま子扱いにされてきた教養部の未来も明るい、と思ったところで夢からさめた。私は、すぐさま、よき時代の、よき三高生の愛した今の図書室を思いやるのであった。(文学部2回生)

図書館の味 坂本 正 子

大学へ入って以来、今まで、1日中図書館にいた日が幾日あったろう。1回生の春休の時だった。2月の末から3月20日頃まで、毎日開室9時から夕方5時まで“図書館の人”となったことがあった。

“図書館の人”はそれ程多くはなかった。しかし試験期のあの雑然とした部屋の状況とは少しく趣を異にしていた。誰も静かであった。ジッと視線を前にすえて何か思いをめぐらしている人を何度も見た。このただ広い、しきりのない部屋の中で、目に見えぬ壁を作って個室に1人、懸命に学習している人達はその半数であった。私にはその情景を見るだけでも図書館通いが楽しく有意義だった。1日の学習を終えて帰る道は、さすがに心が清々しい。1日の学習が更半紙の中に蓄積される。それが何ともいえず心を満たしてくれたのだ。

人類の起源、生命の起源、さらにさかのぼって地球の起源、宇宙の起源等、起源の問題を頭だけで、しかもありったけの力を出して考えた。3月20日になると更半紙が60枚たまった。その中にあの時の私の全てが秘められている。学校にあって、勉強したり、合唱をやったりしながら、時々暇な時に引っぱり出してみるこのノートを眺めながらそう思うのだ。

それ以来私は図書館の味を覚えた。

時折、府立資料館へ行ってみると、この本部図書館に比べて、格段の設備の良さ。全館暖房、室温16度、素晴らしい明るさ。そのひとつひとつに何か面喰う思いがする。でもやはり“図書館の味”があった。

話は違いが合唱をする中に、合唱の味、すなわちハーモニーの美しさや、共に歌う仲間が心が解されていくだろう。図書館にあって同様だ。学習の内容は違っても個々人の自学自習の場である。真剣に仕事に取りくむ場である。そしてその中から“図書館の味”が解されていくのだから。とは言え、この味をかみしめるべき大前提を知らぬ者、忘れてる者が多いようだ。“図書館の味”を作り出すのはそこに会ったものの役目である。話は慎しむべし。鼻をならすのも慎しむべし。歯をぎしぎしされたらたまらない。図書館へ来て最も嫌なものは“図書館の味”をかみしめよ

うとしない人だ。

この「静脩」の前号で図書館に入って左に掲げてある「雲」の事が書いてあったが、この「雲」はいつまでたってもうすよごれた「雲」である。「すぐれた美のかたちを秘めながら静かにほんとに静かに流れている。」図書館の雲は、雲自身の涙でほこりを洗い落さねば、本来の姿に返ることができないのか。

こんなところにも、私たちのまわりの何か殺伐とした感じが象徴されているように思われる。せめて図書館からでもそうした感じは拭い去っていききたいものだ。

(理学部2回生)

資料紹介

○ 日本資料協会編 **日本年鑑類総目録** 昭和39年3月末現在 昭和39 236P 清和堂刊

さきに刊行された「戦後日本年鑑類総目録」に600余点を追加、総計2,800点の年鑑類を収録する。年鑑と題するものとともに、年刊の官公庁・会社・研究機関の要覧、統計、調査報告を主とし、若干の人名録、図書目録を含んでいる。学術研究報告についても誌名に年報と題したものを収録している。これらを主題別に分類排列し、巻末に書名索引、発行所名簿を附しているが、従来このような年鑑類の目録が見られなかっただけに貴重である。

○ 清和堂編集部編 **戦後日本雑誌総覧** 社会科学の部 1963年3月末現在 昭和38 161P

昭和21年以後昭和38年3月末までにわが国で刊行された社会科学関係の雑誌1,000点の要覧である。戦後逐年増加する雑誌のおびただしい発行、改廃に備えて、出版事項を端的に知り、調査研究者に便ならしめんと意図のもとに編集されたもので、誌名の五十音順排列。編者、発行所、創刊年月及び最近の巻号とその価格が記載されており、また巻末に編者・発行所の所在地が附されているから、発注またはバックナンバーの入手にも便利であろう。

○ 慶応義塾大学ス道文庫編 ^{江戸時代}**書林出版書籍目録集成** 巻1～3、索引 昭和37～39

4冊 井上書房刊

本書はその名の示す如く江戸時代に江戸・京都・大阪の書肆が刊行した当時の出版目録の集大成であって、かねてより慶応大学図書館に江戸時代の書籍目録のコレクションとして収集されていたものを写真版とし、それに解説を附したものである。これらの目録は現今の出版年鑑に相当するものであり、現在判明しているものは23種、寛文より享和に至る間に刊行されている。そのうち14種は全巻を本書に収載し、残りは増修版であるから増修の箇所のみ掲げてある。本書によって江戸時代の板行情況を具さに知る事ができると共に、書誌学上にも活用範囲が広いと思われる。

○ 大阪図書出版業組合編 ^{享保以後}**大阪出版書籍目録** 昭和39 459P 清和堂刊

この本は昭和11年、大阪図書出版業組合事務所に保存されていた記録「開板御願書控」(享保9年2月～明治6年12月)34冊を本体とし、大阪書籍商仲間沿革略・書名及著者索引・絶板書目を附して刊行したものの復刻版である。願書であるから、ここに記載のものがすべてが許可されて開板されたものとはいえないが、大阪において出版された図書のみが年代順にまとめて集められているので、出版業のほとんどが東京に集中している今日、往時の上方特に大阪出版界の盛況を物語るものとして貴重な資料といえる。

○ British Museum. General Catalogue of Printed Books(大英博物館印刷図書目録)
大英博物館印刷図書部編 v. 1—51 (A-Dez), 1931—54. v. 52—243 (Df-U. S. A. C) (1955),
1959—64 (以下未刊)

大英博物館図書館の600万以上に及ぶ蔵書の大部分をしめる印刷図書の目録である。これは、1881—1900年に発行された Catalogue of Printed Books (95 vols.) と、その補遺篇 (13 vols. 1900—1905 刊) との増補第2版であるが、1931年、v. 1が出版されて以来、いまだに全巻完結していない。既刊のもののうち、v. 1—51を一群とし、v. 52以下をもう一群として考えてみよう。v. 1—51は、年2—3冊づつ、24年間にわたって発行され、各巻は、その発行年の、1、2年前までの蔵書をカバーしているようである。v. 52以下は1955年現在の蔵書を対象に、写真印刷によって、1959年以来出版され、現在、v. 243までできている。同図書館の計画によると、ここ1、2年のうちには、300巻以内で、全巻の出版を完了する筈である。なお、この版に記載されなかった増加図書のために、当然、後日、補遺篇が出るものと思われる。

この目録は、アルファベット順著者目録なので、使用者は、目指す図書の著者名から検索しなければならない(ただし、無著者名図書は書名から)。その他、この目録の特徴を若干あげると、1) 伝記・作家研究等の場合、著者名からはもちろん、被伝者名や、研究の対象となつた作家名からも記入されているので、両者から検索できる。2) 官公庁の出版物は、その官公庁に属する国家名のもとに集められ、国家に関する著作は、その著者名からも、取扱われている国家名からも探することができる。3) 聖典、コーラン等は、“Bible”、“Kur’an”等、聖典名から検索する。それらについて書かれた図書は、1)、2)の例と同じように、著者名からも、聖典名からも検索できる。4) 定期刊行物は、“P”の部の“Periodical Publications”の所に含まれている。そこではまず、定期刊行物の発行地名が、ABC順に並び、各地名のもとに、誌名がABC順に排列されている。しかし、たとえ目的の定刊物の発行地がわからなくても、使用者はなんら困らないだろう。というのは、誌名を、たとえば“Japan Quarterly”を“J”の部で探すと、“See Periodical Publications-Tokyo”と参照記入されているからである。この種の参照記入がこの目録の全般にわたって、豊富に使ってあるので使用者には便利である。5) 記入事項は、著者名、書名、編者、訳者、版次、出版事項、頁付、サイズ等、比較的簡潔に記入されている。

フォード財団よりアメリカ研究基本図書を贈らる

アメリカ研究センター図書室へ

昨年フォード財団からアメリカ研究のための基本図書セットを日本の大学へ寄贈することについて、日本アメリカ研究振興会に申し出があった。同会では、小委員会を設け、立教大学の清水博教授を責任者として審議した結果、東京大学の本間助教授が受贈図書選択のため渡米され、財団その他と協議し、アメリカ研究機関を有する日本の諸大学に受入れることになった。

本学にもその1セットの寄贈を受けることになり、このたび本館アメリカ研究センター図書室に1セット309冊が、昨秋11月中旬に到着した。目下整理中で、2月上旬からひろく閲覧できる見込みである。

このセットには特に社会科学・歴史学関係の図書が多いが、いずれもアメリカ研究のための基本的良書である。

分類別総目録は、同図書室の図書月報第6号として発行される予定である。

——学生との図書館懇談会（第2回）開く——

39年12月、第2回目の学生との図書館懇談会が行われた。学生側から8名（法学部4名、工学部3名、文学部1名）が出席した。

前回の懇談会のさいに、学生の要望として出され、改良された閲覧室の照明のその後の効果については、学生側から、いま一層あかるくする必要があるという意見と、良くなったという意見があった。

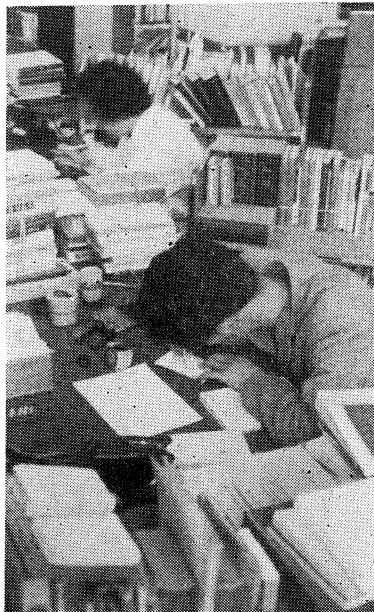
また読書については、図書館の方が落ち着いて読めるという者と、自宅や下宿の方が落ち着けるという意見が出されたらしいが、一般に図書館の行なっている各種サービスについての学生側の知識が十分でなく、この点で図書館側のPRの不足が痛感された。

一館内めぐりー

和漢書及び洋書目録掛

毎日収集蓄積されるぼう大な図書の中から利用者が必要とするものを、すばやく探し出すことは容易なことではない。図書館では、そのために、実物代りに利用者と本とを媒介するものとして目録（カタログ）を作っている。目録は、図書館の鍵であり、目録掛員は鍵の製作者なのである。京大図書館での鍵の作り方を紹介してみよう。

まず、本館独自の規則により、図書の基本的事項を記載する基本記入カードの作製がおこなわれる。本館では、和漢書の場合書名主記入方式を、洋書の場合は著者主記入方式を採用している。標題紙、奥付などによって、書名、著者名、出版地、出版者、発行年、頁数、背の高さ、図版の有無など、現物にふれなくても、その図書のイメージがわかるように記載する。さらに完全を期するため、共著者、訳者、編者等の副記入のたぐいも記入し、最後に所属する学部、教室名、受入年月日、受入番号を記載して、やっと1冊の図書の基本記入カードができ上る。



受入掛が図書の出生届をおこなうとすれば、これは子供の生いたちや、育ち方などを点検して母子手帳を作成するようなものといえよう。

この基本記入カードは、ゼロックスという機械で複製され、その図書の属する学部の図書室へ配達されるカードと、本館の全学総合目録に編成されるものとに仕分けされるのである。現在、本館の持つ目録には、前記の全学総合目録のほか、著者名目録、書名目録、分類目録がある。

以上にのべたのは、もちろん基本的な仕事だけであって、目録掛では、これらの仕事以外にも多くの労力と時間を必要とする仕事がある。たとえば、往々にして基本的事項のひとつないしそのすべてが不明な図書がやってくるが、このような表紙も奥付も欠除した図

書などは、完全な身元や、生いたちを調査するのに、多くの時間を必要とする。時には、たった1冊の本のために掛全員のまる1日の労力が払われることさえある。

このように、利用者の皆さんが、的確に自分の必要とする図書を何十万冊かの中から探し出せるように、完全を期して努力を続けているのであるが、まだまだ本館の目録は利用者にとって至便なものとはなっていない。その理由のひとつは、分類表の不備である。本館の図書分類表は、明治30年の創立当時に作られたものを現在も使用しているので、その間、60余年の歳月を経ているため、いく度か部分的に改訂を加えたけれども、日進月歩の学問の進展に追いつかず、抜本的な改訂または新分類表を作る必要に迫られている。

昭和38年度1年間に受入れられた図書は7万冊以上である。その量は1冊の厚さ3糎とすると2,100米の長さになる。1日200冊以上を整理してやっと追いつける量である。(ただし、法、文、経の3学部図書は本館で整理しない。)各冊に平均5枚のカードを作るとすると、7万冊では35万枚となる。カード100枚で3糎とすると、35万枚では135米、1,000枚入りのカード箱が毎年350箱必要となる。

あらゆる国の図書、あらゆる分野の図書について一定の規則に従い目録を作る司書は、特殊な技術熟練が要求される。現在だけでなく将来にわたっても普遍妥当する目録は、一定の秩序を保ちつつ混乱を生ぜしめないことが必要である。はなやかな図書館活動の舞台裏でじみにカードを作り、目録を編成している目録掛があることを忘れないでほしい。

アジア研究米国書籍展開催

と き：2月9日(火)―12日(金)

毎日午前10時～午後5時

ところ：付属図書館陳列室

極東および東南アジア地域に関する、最新の学問的成果を示す米国図書約600点余の展示である。ますます国際的な注目を集めつつある地域に関する米国書籍展として期待されている。

あとがき

▶新年の増大号をお届けします。御覧のように、年頭にあたり「夢の図書館」を特集しました。学生諸君の「将来の図書館は、こうあって欲しいという単なるビジョン」にすぎないもの、として片付けてしまえばそれまでですが、われわれの持つ貧弱な図書館設備を考え合わせる時、なかなか面白い読み物となっております。

▶資料紹介、館内めぐりが各方面からわりあい好評をいただき、創刊号の企画以来全力を傾けて編集にあたってきたわれわれの努力は、いささかなりとも報いられたと考えております。しかし、われわれは絶えず前進しなくては満足できません。その意味で読者諸賢よりきびしいご批判を寄せていただき、立派な館報にしていきたいと思っております。今後のご鞭達を切にお願いいたします。

(S・H)